

改めて今後の相談、と来る前に奏美は英一と話したいことがあると言った。それに英一は訳もなくどきりとした。その身に疚しいところがあると云うでもない気でないながら、月子の偽物の件でわだかまりを残していると云う認識が自らの内にありありと認められたものだった。しかし周囲も敢えて止めない。二人が本来仲の良い男女でありどこか青臭いなりに微笑ましいところを見せていたのを誰もが知っていた。中庭の北側にある時空間転移マシンの方にぞろぞろと移動する面々の声が遠ざかったところで、木陰に佇む奏美が口を開いた。

「あの……英一くん。その、ごめんね。昨晚はつい、ひどいことを言っちゃって」

「いや……普通あの場合だったら誰でもああ云う反応をすると思う。俺も悪かった」

「後で確認したけど、あの時斬られたものの痕跡が、月子ちゃんの……死体が無かったから。だから、多分月子ちゃんは生きているんだと思う。あれは英一くんが見立てた通り偽物、化けていた怪物だったんだよ」

「……いい。そうであるかどうかが問題じゃないから」

「そうじゃなくて……。ねえ英一くん、さっき言ってたよね。あの《悪夢憑き》って奴と前にも会ったことがあるって」

「ああ」

「その、英一くんの口振りだと、つい最近って感じじゃないよね。いつから……あれと会ったの?」

「え? そりゃ確か……《捕食者》と初めて遭遇した後、逃げ切ったけど疲れてそのまま寝ちゃった時に見た夢の中だった、かな」

「夢の、なか?」

「ああ。だから誰にも信じて貰えないだろうと思ったんだよ。けどその少し前位に正雁先輩はあいつを直に見たらしくて、それで先輩とだけはこの話をしてた」

「……」

「奏美?」

俯き、何かを堪える様な表情を奏美はしていた。……英一には汲み取りかねるところだったが、奏美はこれでも自分は彼に一番信頼されている一人だと自負があり、またそれを密かに喜ばしく思っていたものだった。小学校からずっと同じ学校。性別の隔てなく一緒に行動し、多くを分かち合ってきた友達。いずれは友達と云う枠組みを超える日も来るだろうと云う幸福な夢想を思い抱いて来た彼女は同時に、この少年の苦しみもまた自分こそが分かち合っていくのだと信じていた。これは一種自惚れに等しい観念で、しかしそれを指摘する者もなき幸福な三人組の一人を奏美は務めていた。今、英一が語ったところは彼の観念に大斧を叩き入れた。この危地にあって最大の大敵と見てよいあの《悪夢憑き》のことを彼は自分に語らず、確かに信頼の置ける相手ではあるがより希薄な関係性しか持たない筈の游次郎には教えていたと云う。故にこそ奏美は(陳腐にも)こう思う。わたし、そんなにあてにして貰えてなかったのかな、と。この思い詰め方には相手の気遣いの形に対する洞察が欠けていた。そんな出鱈目なことを語って多くに怯えている奏美の如きを余計不安にさせてどうするのだと云う英一の実に尤もらしい配慮は、皮肉めいた自身に対する焦点の偏りをその思考に起こした彼女の認識からすり抜けてしまっていた。

「ううん、何でもない。ごめんね英一くん、つまらないこと聞いちゃって」

「いや……別に気にしなくていいよ」

これで二人の会話はどこか不自然に途切れた。お互い何故かこれ以上の文言を思いつかず、ただ相手の様子を窺うように見やりながら沈黙を保ってその場に佇むだけになった。その曰く言い難い気まぐさを向こうからやって来た紹がどこか無遠慮な調子で破る。

「おう葦杜、瀬之川さんとの話はもういいか？　なら伝えるけど、あの一番奥んどこ行く面子が決まったぞ。お前と正雁先輩、それにあの坊之威って人。おれも行こうかと思っただけ瀬之川さんだけ嘉尾のおっさんとここに残しとくのも何かあった時不安だから残ってくれて頼まれちゃった」

「あ、ああ。分かった」

「別におっさんが今になって妙なことするとは思ってねーけど、やっぱ何湧いて来るか分かんねーかなあ。男手が残って欲しいって言われて男子で一番背がちっちええおれが、言っちゃえば一番弱そうだから居残りになっちゃった。葦杜はいいよな、そこそこ背あるし強そうな武器もあるんだからよ」

「いや、僻まれてもな」

「へいへい悪かったよ。ま、精々おっさんの期待通りのモン見つけて戻って来てくれや。それまでイイ子にして留守番してっからさ」

悪童の様な調子で彼はそう言い、くるりと踵を返して立ち去ろうとする。そこへ奏美が強い調子で言った。

「わたし、一緒に行きたいです。みんなに伝えて下さい」

英一が驚いたのは内容よりもその決意めいたものを感じる口調からだった。背を見せていた紹はちらと奏美を振り返って、一つ鼻を鳴らす。

「そう。んじやおっさんたちに相談しなよ」

こう云う次第で再度話し合いが持たれ、今の組み分けから奏美を探索組へ移すことが決まった。日暮れまでには戻る、と云う予定にて四人は中庭を出、階段を登って行った。

英一はどこかやりづらそうにしているのだが、奏美は英一と並んで歩こうとする。後ろを固める游次郎と兼輔はこれを眺めながら話す。

「正雁さんよ。あんた、瀬之川ちゃんのことどこまで知ってる？」

「そんなに深く知っている訳じゃないですが。葦杜とこの場にいない霧海共々仲の良い友達同士なのはうちの部内でよく知っています」

「ふうん。両手の花の三角関係とは、何とも妬かれそうな話だねえ」

「あいつはよくからかわれている割にあんまりそう云う自覚がある様には見えませんけどね」

「はは、そんな感じがするよ。気の良い奴だし大体率先してやろうとする方に見えるから好かれる理由はあると思うけどね」

「そうですね……ま、良い後輩ですよ。瀬之川と霧海共々にね」

「ん。んでさ、これ……どう思う？」

「どう思うと云うと？」

「何かさ……焦ってんじやねえかな」

兼輔が目細めて奏美の後ろ姿を見る。これまでこの二人と何度か同行して来たこの男には英一がまず前に立って奏美はその後ろから様子を見ると云うのが常なる挙動であるかに思われていた。そこを敢えて並んで歩こうとする。今この場に、馬鹿馬鹿しく考えるなら奏美を脅かす恋のライバルらしき存在がどこにもいないにも関わらずだ。

「ひでー目に遭い過ぎて心が壊れる、つてのはまあ分かるところだけだよ。そう云うのとはどうも違うよな？」

「確かに」

「既に死んじまったと聞いたがあの人と一緒に行動してた子に名賀搗って云う、如何にも運動の出来なさそうな小柄な子がいたんだが。葦杜はそう云う子たちをずっと守って来てるんだよな」

「……」

「葦杜の方が思い詰めているってのは取り立てて不思議でもない。俺の見てる前でも人死にに直面し過ぎて。瀬之川ちゃんも丁度同伴していることが多かった」

「あいつの心がボロボロなのは分かりますよ。飛井が死んだ時それこそ何もかも厭になった様な感じだったんですから」

「そんなあいつに守られてばっかだった彼女、何か言われたんかね。今度は自分が守る番だとか、漫画みてーなこと思い付いたんじゃないだろうな」

「注意した方がいいですかね」

「多分な。それと、お前も溜まってるもんがあったら俺なり葦杜なりにでも吐き出しとけよ」

「え？」

「あらましは大体聞かせて貰ってるけど、お前ほぼ単独行動して来たじゃん。よく生き残ってこの城まで辿り着いたな。俺だったら絶対無理無理」

兼輔がそう茶化す様に言って笑った時、奏美が声を上げた。見えましたが、と。四人の視線の先には歳月と風雨に褪せながらも往時の風情を思わせる石造りの階段と渡り廊下を通じて山腹に小さな宮殿を思わせる建築物が築かれていた。四人はその門に掛けられた錠前を確かめ、英一が鍵束を試して行く。そのうちの一本が刺さり、ガチャリと音を立てて門を開かせた。古びた門は手入れも長らくされていなかったが故にこれを開くのにも幾らか苦勞させられたが、どうにか両扉の内片方の扉を開けることに成功し、中を伺い見る。窓から漏れ入る外の光だけではその空間は暗かったが、広間を思わせる。ライトを点けて中へ静かに踏み入った四人は周囲を見回す。中にはいつのものとも知れぬ屍が幾つも散乱しており、否応なく英一たちに不穏さを抱かせた。広間の奥には小階段と一つの大きな椅子がある。さながら玉座の間と云うところだと思われた。もはや誰も一々考えないが、全くありふれたファンタジーの如き情景。玉座は空だったが、北側には扉が開かれたままの場所がある。何が待ち受けているのか。四人は歩みを進め、その中に踏み入った。

「……」

奥の部屋は大きな寝台や書棚、鏡やクローゼットと云う風に調度品が立ち並んでいた。そのどれもが歳月と共に古びて外と同じく半ば朽ちている様なものであった。その寝台の上に、何かが座っている。座っている何かはライトを向けられるまでもなく闇の中より赤く妖しく輝く双眸で英一たちを見た。

「キサマラモ……ヨヲアザワラウモノカ……」

その独白の如き一言が発された時、英一はふと視界の端に映っていたものに目を惹かれライトを向けた。そこには引き裂かれた屍があった。古びた白骨死体。女物のドレスを纏っていたものの様に見えた。その周囲にまだ幾つとなしに屍が見える。それらはどうにも体格が小さく、子供のそれである様に思われた。嘲笑うって、何が？ 英一は疑問を抱いた。そして不躰にもそのライトを声の主に向けた。声の主はやはり屍であった。何故か生者同様の姿勢で膝に手を置いて座っている男の屍。その頭には成程、冠が見える。纏う衣服も擦り切れボロボロになってこそいるが威厳ある王者のそれであろう。即ちこれが、『悪夢憑き』の言った『王』だと云うことだ。

「ソノブレイ、シヲモツテツグナウガヨイ……オオオオオオオオオオッ！！！」

咆哮が迸った。それ一つで吹き飛ばされかかった英一たちは後ずさり、王の屍がこの真っ暗な部屋の中でも漆黒の気配を纏って肥大化しつつあるのを見、危険を感じて部屋から飛び出した。出て直ぐにぶわりと空気を伝う衝撃があった。そして部屋の入口よりそれは現れる。黒い靄の様なものに包ま

れた、下半身は大蛇の如きもので上半身は王の亡骸を成すものが。亡骸の眼窩からはやはり不気味な赤い光が覗かれた。

「来るぞ！」

游次郎の言から戦いは始まった。王のその右腕は醜く膨れ上がった巨大な腐肉の肉塊を思わせ、その一振りを英一は辛うじて躲したが当たれば果たして命があるかと云う気迫を感じさせられた。突き出された左腕を兼輔は避ける。その先端は平たく尖っており如何にもこれで相手を切り裂くのである。游次郎はこの両者に構った隙に銃を構えて王のその頭蓋骨目掛けて撃ち放った。それは確かに口腔を貫く様な形で直撃した。しかし骨を穿つ乾いた着弾音がしただけで王は痛痒ともしている様子がなかった。

「こんな時……そうだ、小春ちゃんが！」

奏美は長らく鞆に仕舞われていた魔道書を取り出した。ともかくもそれを開いたが、読めない文字と謎めいた魔法陣が描かれているばかりなのを奏美は今更の様に知って困惑し、どうすればいいのかと狼狽えた。そこへ王が目敏く向き直ってその大きな右腕を伸ばす。

「瀬之川！」

一番近かった游次郎がとっさに奏美を突き飛ばす。それで王の右腕から彼女は逃れたが、游次郎が代わりに掴まってしまう。ぎり、と音がした。胴を握られた游次郎の悲鳴が部屋に響く。それを見て半狂乱の様な雄叫びを上げながら英一が突進し、その右腕に剣を突き刺した。血とも霞とも知れぬ飛沫が飛び散り、王が俄かに苦悶の呻きを発して游次郎を解放した。地に落ちた彼はしかし激痛で身じろぎ一つ出来そうになかった。だが少なくとも肉の部分には効くらしいことを認識した兼輔が追撃とばかりに得物の錆びた槍を左腕に突き刺す。確かに手応えはあり王はよろめいたのだが、ぎりと兼輔を睨んだ王は左腕を上げた。諸共持ち上げられるのを直感した兼輔は慌てて槍を手放した。

「何てこった、これじゃ手出しが出来ねえ」

徒手空拳となった兼輔をしてこの化け物に真っ向から挑むのはただの自殺行為に外ならず彼は悔しそうに臍をかんだ。対し英一は剣を引き抜き、未だ刃の鋭い面をして更に右腕を切り付ける。肉を切る不気味な音が幾つとなしに鳴り響き、王は唸りながらその右腕を振るって英一を吹き飛ばしに掛かった。殆ど咄嗟に彼は跳んでその右腕に乗り、そのままこれを蹴って飛び降りる形でこれを躲す。こんな器用な真似が自分でも出来るとは彼も思っていないかったものだが、それに慢心しているほど彼に余裕はなかった。王の右腕は再び近付き、彼を掴み取ろうとする。一瞬彼は考える。この手、斬れるか？ それへ思考が応ずる。やってみるか！ 英一は力一杯に剣を横薙ぎに振るった。その斬撃が右腕の掌を強かに切り裂く。浴びる返り血は浴びた傍から蒸発でもするように消えた。王は痛苦を感じるか呻きながらその右腕を引っ込めた。掌は大きな斬痕が残り指の二本は落ちかかっている様にも見えた。

「これなら……っ！？」

僅かに優位を信じようとしたところで英一は目を疑った。じゅくじゅくと気色の悪い音を立てて王の右の掌から肉が再生して傷跡を塞ぎ始めた。これまでも大概だったが文字通り化け物じゃないかと彼は悪態を吐きたくなったがそれどころではなかった。再生されて復活したらしいその右腕は拳骨として英一目掛けて襲い掛かり、横に飛んで避けたものの床に直撃したそれは転がっていた屍共々床を砕いてめり込んだ。反対側では兼輔が振り回される左腕をどうにか避けて突き刺さったままだった槍を引き抜いたところこれが半ばで折れてしまい彼を啞然とさせた。そしてこの状況に游次郎は尚も地に臥せており奏美は右往左往しているばかりだった。

「奏美、何とかその魔道書使えないのか！？」

「っ、使いたいけど使い方分かんないよ……！」

小春が半ば直感的にそれに触れることで何をすべきかを理解したのに対し奏美は周囲の状況に心を掻き乱されて出鱈目にページを捲り何か読めるものがないか探しているばかりだった。そしてそう云う自分に対して彼女は思う。何でわたしはこんなにも肝心な時に役に立たないんだろう！ 西の楼閣の時だって大したことは出来なかったのに！ しかしこんな焦りを敵が慮ってくれる筈もない。王は兼輔をその腕で強かに弾いた。避け切れず打たれて地に転がった彼は意識こそあったがすぐには立えない。その隙に左腕が奏美へと狙いを付け、縦に打ち下ろされる。これに英一が飛び込んでその剣を以て受け止めた。

「え、英一くん……！」

「逃げろ」

英一の手足はその圧を支える為に震えていた。じりじりと押されている。或いは剣の方が先に圧し折れるやもしれない。……こんな時に奏美は恐怖に囚われていた。英一がこのままこの化け物にやられて死んでしまうのではないか。自分はそれを目の当たりにすることになるのではないか。ここで背を向けてそれから目を逸らし、その後どうなる？ 堂々巡りの無益なことが彼女の脳裏で占められた。

「逃げろって、言ってるだろ」

「えい、いち、く、……」

奏美はむしろゆらりと、魔道書すら手放して彼に近付いた。それは剣を支える彼を支えようとする動作に思われた。立ち上がりながらこれを見る兼輔には心中の動作とも映った。……押し負けつつある。やがて英一は膝を屈し、そのまま左腕に潰されることになるだろう。兼輔は殆ど無我夢中で折れた槍の柄を掴んで投げ付けたが、焼け石に水だった。見れば右腕がゆらりと上がって横薙ぎに振るわれようとしている。王が勝利を確信したかの様に哄笑して叫んだ。

「ホロビヨ！ ワレヲオトシレルモノコトゴトク！」

その言の末に重なる様にもう一度銃声が響いた。游次郎が臥せりながらも胴を起こして銃撃を与えた先は王の胴体だった。それが何かを砕いた様な音を引き起こした。……王が苦しみ始める。その大きすぎる右腕で胸甲を抑えて苦悶の声を上げ始めた。左腕も力を失って退けられ、英一は紙一重で命拾いした。戦慄く両足、戦慄く両腕。自分が未だ剣を持っていることとは奇跡なのではないかとも思われた。彼は奏美を顧みた。奏美の手は英一に届いていなかった。それがまるで二人に断裂を残した様にも映ったのは兼輔の気のせいだったのだろうか？

「胴だ、胴を狙え……何か、ある！」

辛そうにしながらも游次郎がそう叫んだ。英一は我に返って駆け出す。王は苦悶から彼に対応出来なかった。英一は胸を抑える右腕を斬り捌いてこれを落とした。落とす程に斬られてなおまともに対応してこない程苦しんでいる王に、英一はその胸部へ剣を突き刺す。明らかに何かガラス質のものを貫いた手応えと音がし、王の断末魔の叫びが辺りに激しく響き渡った。王の双眸は憎々し気に英一を見、左腕がのろろと振り上げられて彼に叩き下ろされる様にも見られたがその眼窩より光が消えると共に腕も身体も沈んだ。異音を立てて王の身体は蒸発を起こし、後には元の屍が仰向けに転がっているばかりだった。その胸部の服の隙間から微かにオレンジ色の破片が覗かれたが、やがてはそれの色を失った。

英一が相手の沈黙を確かめている間に兼輔は游次郎へと駆け寄った。……やはり奏美はその間に立って何も出来なかったままの自分を見出した。何をぼけっとしていたのだろうか、と彼女は顧みた游次郎の呻く姿を見てふと我に返り、自分もまたその看護へ赴いた。

「大丈夫か？」

「あがっ、流石に、とても大丈夫とは……。何本か、肋骨でもやられたのかな、胸の内側で、痛みが、引かない……いぎっ」

そんな容体で無理矢理銃もう一度銃撃を行ったのだから本来なら悶え苦しんで受け答えの余力もないところだろうが、と兼輔はこの若者に称賛の念を抱いた。この場は薄暗いので一旦外に出して怪我の具合を確かめねばならない。それで彼は奏美に促して游次郎を両肩から支え上げた。実にそれをされるのも辛そうなところだがこのままでは動くこともままならない。この場は我慢して貰うしかなかった。

「葦杜、奥の部屋をもう一度調べて来てくれ。俺らはすぐ外で正雁の容体を見てるから」
「分かりました」

英一は奥の部屋、王の私室へもう一度踏み入った。主を失ったそこは暗闇と静寂だけが立ち込めていた。ライトをかざして彼は部屋の中を改めて観察する。すると、王が座っていた寝台の後ろにどこか場違いな趣のある機械らしき一塊が転がっていた。おそらくこれが求められている部品なのだろう。英一はそれを掴み上げ、仲間の元へ駆け戻った。

宮殿区画の外では游次郎が上着を脱がされて応急手当を受けていた。と云っても、目立つ傷口があったなら消毒液を塗って絆創膏をしてやるのが精々のところ、その怪我は表面的なものではないらしく王の右腕に挟まれた痛々しい圧迫痕を確かめることしか出来ていなかった。

「外出血がないだけマシなのか実に分かんね。俺は医学は門外漢だから満足にしてやれることもない」

兼輔がどこか諦念を交えてそう英一を見上げながら語った。仰向けにされた游次郎の呼吸は荒かった。英一は彼の前に傳いた。

「正雁先輩……」

「そんな顔、するな……誰も死なずに、あの化け物を片付けれたんだ、良かったじゃ、ないか……」
「でも……」

「俺のことは、いい……お前は、瀬之川と、霧海の無事だけを、考えろ……」

何だってそんな他者の心配をこのような時でさえするのかと思われた。それは游次郎を囲んでいる内の一人である奏美も同感だったらしい。一際悲しそうな顔をしながら奏美は問い掛けた。

「どうして、先輩はそんなに……ずっと、優しいままでいられるんですか……？ どうしてそんな、自分のことじゃなくわたしたちのことを考えてくれるんですか……？」

それを聞いて游次郎は奏美を見た。そして少しだけ鼻を鳴らし、笑った。

「大したことじゃ、ないが……、俺はな、お前たち後輩部員に、感謝、してるから、こんな時ぐらい意地を、見せてやろうと、思ってた……」

「どう云うことですか……？」

「俺はな……親父の子じゃ、ないんだよ。腐ったことを考えた馬鹿がおふくろを脅して、無理矢理仕込んだ種だったのさ……。それを知ったのは学園進学直前の時で、しかもそれはもう終わった話に過ぎなかった……。遣り場のない疎外感から逃げる為に好きだった美術に打ち込んだのに、一年の時はまるで駄目だった。何を描いても逃避から描かれた、何かの模倣にしか出来なかった。惨めだったんだよ。でもな、そんな俺を、新しく入って来たお前らは、上手いって言うてくれて、手本を教えてくれて……何度となく邪険にしたつもりだったのに、構わず手を差し伸べてくれて、さ……」

「邪険だなんて……先輩が俺たちを嫌そうにしてたのって、本当に最初の頃だけだったじゃないですか」

「そうかな……そんなつもりはなかったんだが……いや、どうでもいい。お前らが、慕ってくるのにすっかり絆されたのさ。だから、気が付けば……少しでも、先輩らしくして、借りを、返してやろうと、な……」

游次郎は辛そうに咳を一つした。周りには見せるまいと彼は堪えたかったのだが、その口の中に幾らか血の味がしたのを游次郎は感じた。微かに飛び散った咳の飛沫が床に散り、そこに赤い色が混

ざっていることを三人は認めた。これ以上ここに留まっても何も得るところがない。兼輔は英一に促して游次郎を再び担ぎ上げようとする。それを少し待ってと英一は止め、奏美に本を差し出した。「えっ？」

「これ、落としたまんまだったろ」

忘れたままに出て来てしまうとは何て恥ずかしいことだと奏美は俯いて凹んだが、直ぐに向き直って魔道書を受け取り直した。英一はそんな奏美に一つ微笑んだ。彼は何も責め、詰る意思を見せようとしなない。内心で奏美はそれがどこか不満にも思われたが、そのことを口に出すことはしなかった。改めて英一は兼輔と共に游次郎を担ぎ上げ、四人は道を引き返し始めた。

夕刻に差し掛かった頃、四人は城内の一階に辿り着いた。落ち着くところのない中庭に游次郎を置いて行く訳には行くまいことから一階西の詰所へ彼を寝かせる、と英一と兼輔は相談して決めていたのだが、北側の廊下に出た時東から足音がしたのを聞いた。それを見た英一と兼輔は顔を強張らせた。「お前は……！」

「やあ、元気にしてたかい？」

暫く姿を見せていなかった侑人がのうとした調子で歩いて来る。その傍らには不気味に微笑む初佳の影が絡み付いていた。びくりと奏美が彼を見て怯える。直接あの現場を確かめていない彼女にとっても、既に死んだことを確かめた相手の影を伴うこの男の異様さは認識せざるを得なかった。

「甫土先輩……何をしに来たんです？」

「葦杜、前に言ったよな？ 初佳は生きてるって。ほら、この通りだ。いるじゃないか。俺は証明したかったんだよ」

「それは俺が見た偽物ですよ」

「葦杜、うわ言は止めなよ。ここでそんな呑気なことを言ったら命が幾つあっても足りないのはお前もよく知ってるだろう？」

「うわ言抜かしてんのはどっちだよお前……！」

「……あんたさ、本当に失礼だよ。見ず知らずの他人にそんな口の利き方して、どう云う教育受けて来たわけ？」

「止めてくれませんか。俺たちは先輩の中の真実には興味がないんです、どうぞ放っておいて、好きだけそれと幸せに生きて下さい」

「お前さ、本当に冷たくなったよなあ……俺はお前や瀬之川と協力してこの碌でもない廃墟から脱出したいだけなんだ」

「止めて、下さい……甫土先輩、どうしてこんなちぐはぐなやり取りをして平気なんですか？ 先輩は……そもそも、生きているんですか？」

奏美の問いかけは一度沈黙を齎した。侑人は彼女を見る。その怯えに不可解と云った視線を投げ掛け、それ故に奏美は拒絶の色を強くした。侑人の傍らの影が妖しく囁う。このやり取りを影は面白がっていた。その嘲笑の標的が傍らの男ではないと信じられるのはこの場にただ一人だった。狂気と云うものは時に異様に静かで落ち着いた色合いをしている……道の端に捨てられた煙草の吸い殻がゴミ箱からこぼれたちり紙に触れて燃え移る様に。

「生きて、いるとも。でなきゃ初佳と愛し合える筈がないじゃないか」

これは侑人にとって最大限優しく、諭す様に発された言だった。彼には奏美の言う『ちぐはぐなやり取り』が何を指すのか認識出来ていなかった。その場にそぐわぬ優しさこそが決裂後と云う筈の現状を異様な、対決色の場面に彩っているのだった。英一は兼輔に目配せし、游次郎を彼に委ねて先に行くよう促した。そして三人の前に立ち、この男を睨む。どうしてそう敵対的なんだと言いたそうに侑人は目を細めて不快がった。

「繰り返します。先輩、どうぞ俺たちには関わらずそいつと、十慧先輩の姿をしたそれと好きだけ遊んでいて下さい。俺たちにあなたの関与、あなたの助けは不要ですから」

「……本当に、何でなのかな。俺がお前やその失礼な奴に何か悪いことをしたか？ 瀬之川にだって特に何か悪いことをした覚えはないんだけど」

「少なくとも、それが分からない内は関わらないで下さい。でないと……俺たちの方が危ないから」

英一の冷静な言に侑人は一つ溜息を吐いた。そして軽く初佳の影を見る。その微笑みは彼に自信を再確認させた。それで、侑人はどこか余裕そうに英一たちを見て言う。

「こりゃあ……どうにもならないね。初佳はさ、お前らと一緒にいりゃ何とかなるって言っちゃくれたんだけど、それとは別にもう一つ教えてくれてるんだよね」

「何を？」

「ひょっとしたらと思ってたけどさ……お前らの方が、偽物なんじゃないかなって。ここまで話が噛み合わないんなら、案外そうなのかもなあ」

ひどい認識だと英一は呆れた。自分の追い掛けた女を自分で殺したことを都合の良い様に忘れた上でこちら側こそが最早本人ではないと嫌疑を吹っ掛けるのは冗談にしたって出来が悪すぎる。英一は努めてそんな内心の呆れを顔に出さずに彼を睨みつけた。侑人はそれにもまた涼しい顔をしている。

「なあ葦杜……一応そう呼んでやるけどさ。お前は知らないだろうけど、初佳がね、凄いこと出来る様になってんのよ」

「？」

「ま、見てみろよ」

侑人がそう言って初佳の影に促すような視線を送った。――影は不気味に嗤う。聞き慣れた凛々しい声。既にこの世から失われた筈の声。その昏い顔から見つめられた時、見えていない様に思われた目が合ったと英一には思われた。影は言う。

「精々頑張って逃げてね、『ニセモノの』葦杜。『ホンモノの』ところに行きたくなければ、ね……」

ドン、と東側の通路から大きな音がした。その音には、その足音には聞き覚えがあった。曲がり角よりぬつと《捕食者》が姿を現す。あんなものがどうやってこの城内へ、と英一が思った矢先、影の嗤いが響いた。見れば侑人が初佳の影共々地に沈む様に床に生じた黒い染みへと沈んで行く。《捕食者》が英一を向いてこれを標的と定めた時にはもう二人の姿は消えて染みも失われていた。英一は最早侑人のことなど考えている余裕もなく走り出す。この通路から南に行っては中庭に出て他の面々に直面させてしまう以上彼に取れる選択肢は階段へと飛び込んで攪乱するのみだった。階段への入口は人間用である以上あの様な化け物が乗り込んでくる空間がない筈であったが。

「マジかよ……!!」

飛び込んだ彼が向こうの様子を伺っていると《捕食者》は躊躇いなく彼を追って階段の入口に突っ込んだ。構造こそ辛うじて持ち堪えているが器用なことに身体を振らせて徐々に乗り込んで来つつある。英一は階段を駆け登った。地下は降りた先の構造が単純すぎて振り切るのに向いていない以上登るに如くはなかった。二階、三階と速やかに上る。その背後よりおぞましい気配が追い掛けて来る。あの八本足はふぎけたことに器用に壁面を足場として登って来るのである。下手な森の中より余程始末に負えない挙動を見せられて英一は大いに焦りながら更に尖塔を登って四階を目指した。四階まで一旦登って吹き抜けの渡り廊下から下の様子を見ようとすると、《捕食者》は気色の悪い巻き付き方で尖塔をよじ登ってくるのが見えて英一は更に恐懼しつつ渡り廊下を走り抜けて南東の尖塔へ移り、急ぎ五階を目指して駆け上がる。その途中で途中で嫌な予感を感じて下をちらと見た英一は《捕食者》がまたその巨体を器用に詰め込んで尖塔内部に入り込み、この螺旋階段の壁面を怒涛の勢いで登って来るのを目にした。常識外れ過ぎるその存在にこれ以上どうしろと云うのか。彼は五階へ飛び

出し、中央の扉を開いて廊下に駆け込む。そこで扉を閉じ、一旦様子を見るのだが……《捕食者》は頭突きを叩き込んで扉を破壊した。その無貌の口を前にいよいよ理不尽極まる思いを抱きつつ英一は南の扉を開いて外に出た。しかし両脇に逃げてもいたちごっこ、今度という今度は逃げ切れるものか怪しまれる。既に激しい勢いで階段を登り続けた英一は息を切らしかかっておりそこから更に逃げる方途を咄嗟に考え損ねた。その彼の眼前にあの由海が吊るされ、落とされた床板が目についた。あまりに頼りないこの床板に半ば血迷った彼は渡り込み、その先端まで（驚くほど器用に！）達した。そしてそれ以上逃げ場のないことを見て振り返る。後ろには《捕食者》が開放たれた扉より英一の様子を窺っている様に見えた。

「……」

英一は下を見なかった。見る余裕もなかった。疲れている割には器用にその床板の上に立って、《捕食者》を顧みていた。その視界の端に一瞬だけ《悪夢憑き》が映って、こう囁いた様に思われた。ココガ、オマエノ終ワリダ、と。——捕食者が跳んだ。それは正確に英一に向かって飛び掛かっていた。開かれた大口から牙が覗かれる。それをゆっくりと感じた英一は確かに、己の最期を実感した。彼は奇跡も何も信じずただ見たくないものを見ないためだけに目を閉じ、待った。無限にも等しいような一瞬。その静寂。……遠雷が鳴り響いたのが聞こえた。英一はそれを聞いて、自分がまだ意識を手放していないことに気付いた。こんな認識は自分がまだ生きていると説明されるべきだが彼は不思議とこの時だけはそう思うことが出来なかったものだ。生存を信じないと云うものが彼の認識を一時的に歪めていた、と云うことである。英一はゆっくりと閉じられていた瞼を開いた。

「え……？」

目の前には大口を開いたままの《捕食者》が静止している。微かにそれは震えていて、縛めに逆らおうとしている様に思われた。何故なのか、と彼が動揺を抱いた時、それまで凪いでいた風が強く吹き付けた。たたらを踏むまでもなく、英一は足を踏み外す。空より落ちる時、彼は《捕食者》の正面に翼が、妹の姿が浮いているのを見た。その翼が自分を見たと思うと、英一はまだ地に墜ちる時一瞬だけ感じるであろう鈍痛を味わうこともなくふっと意識を失った。